霧消したのであつて、史家の裨益せらるゝ事大なるを信じて疑はない。巻末の主要事項年月表は本篇の中に出る各種事項の主要なものを、年月順に配列して以て各章節間の錯雜した關係を、一目瞭然たらしめた著者の用意周到な遠慮に本くものであつて、これ亦讀者の益せらるゝ所大なるを思ふのである。

附錄の別冊は別ち御物大矢野本蒙古襲來繪詞の縮寫複製で、著者の考定した新順位によつて其の繪詞を排列されたものである。この繪は後の「清太祖實錄戰圖」の滿洲族の戰爭樣式その他風俗諸態を明示する如く、世界的に活躍した蒙古兵の風貌武器軍船等を如實に知悉せしめるに足る貴重な圖錄であつて、或意味に於ては世界的珍寶と稱するも過言ではなからうと思ふ。全五十七葉の圖版より成る歴史的記念物。これ有るが爲に元寇の研究が如何に精彩付けられるか云ふ迄もない所である。

以上蕪辭を列ねて本書の紹介に代へる事にする。終りにこの勞作を出された博士の努力に滿腔の謝意を表すると共に、此意義ある出版を惜しまれなかつた東洋文庫の學績を衷心感謝する次第である。（四六倍判。財團法人東洋文庫刊。限定賣價拾貳圓）〔鶯淵〕

彙報

◉史學研究會

例會 二月六日午後一時半より樂友會館樓上に於いて開催、左の兩氏の講演ありて午後六時閉會した。來會者六十餘名。

桃山時代の襖繪に就いて　土田杏村氏

當代の屏障畫家として著名な松榮、永德、等伯、山樂に就いて從來作家の明瞭なものが少ない。殊に永德において甚しいものがあるを說き、其の推究の一法として氏は各作家の畫癖を仔細に分解且つ綜合して作風の根據をつかみ解決を與へんとし、論述の中心を永德の作風に置き、其の點描構圖土坡の形式及皴法を詳細に說き京都大德寺聚光院のものを以て永德の典型的大作であると論斷し、これに基いて京洛及近畿所在寺院の傳永德、元信と稱する作品に一々明快な批判を與へ、永德の作風は要するに時代的風格を表すと共に叙情味のあると云ふ個性に到達せしめられた。更に同樣の論法を以て松榮、等伯、山樂に就いて概要を說明さるゝ所があり、繪畫鑑識上主要な一據所を指示するものであつた。

琉球の墳墓に就いて　濱田耕作氏

一月上旬、琉球を視察された博士に題目の講演を煩はした。次に其概畧を摘記する。

ペルリー提督日本訪問記に那覇港に近づいた際、陸上に點綴する白點を眺めて恐らく住居であらうと思つたものが上陸するに及んで凡て墳墓であつたと記してゐる樣にエジプトと同樣に琉球の第一印象は墳墓である。墳墓の型式は大別して三となる一は掘拔式二は破風式三は龜甲式であつて、後の二者が主型式をなしてゐる。二者とも山丘の一面を利して築造し破風式は家屋型を龜甲式は蓋部平面をなし、いづれも其外圍に周垣を繞らしてゐる。特に龜甲式のものは內地の前方後圓形をなしてゐることは興味がある。石材は凡て珊瑚礁から切出したものである墳墓は家族墓の形式に屬することは云ふまでもないから遺骸は其都度洗骨して壺に納れておさめる。斯樣な墳墓の構築は其系統を南方支那に求めるものであるが、德川期以降の型式であるこの兩式を嚴存する那覇市附近の墓街を見ることは一つの壯觀と云へる。以上のものは現代の型式であるが、古式のものは首里王陵の「たまおどん」(玉御殿)であつて破風型の系統に屬し、尙圓王(文龜元年)以降歷代を葬る處である。其構築頗る素簡且つ豪放であつて、嘗て伊東博士の批評せる如く鬼氣身にしみ神祕的な靈感の迫るものがある。實に陵墓建築として典型的なものとするに躊躇しない。この「玉御殿」の前に碑石ありて「たまおどんのひのもん」とし表面は和文を以て裏面は漢文を以て因由を刻し和文の末尾に大明弘治十四年(文龜元年)九月六吉日と支那年號を現してゐることは和文碑銘として一層興味を惹き、尾張熱田の裁斷橋銘と共に特筆さるべき和文金石文である。

次に「玉御殿」より更に古いものに浦添の「ようどれ」がある。「よう」は「夕なぎ」を「どれ」は「どよめる」を指すものであつて、靜處を意味する。其築墓は險崖を利した洞穴式のものであつて英祖王(西紀一二六〇)を最古とし其後約四百年を經た尙寧王とが葬られてゐる。尙寧王は島津氏の爲に捕はれたことを恥ぢ、遺言して此地に葬らしめたものとなつてゐる。兩陵ほゞ同一の構造である。こゝにも碑閣ありて其碑面は「ようどれの碑のもん」とし前と同じく和文にて刻し萬曆四十八年(西紀一六二〇)かのへさる八月末日とし其末文に「このすみの淺くならばほるべし」云々とあるは此種の金石銘として特異をなしてゐる。

更に琉球の北方、爲朝の上陸せしと云ふ運天に「百按司の墓」がある。洞穴式のガマ墓で此種のものが二三ある。その洞穴內には人骨を納めた小形の家型棺が置かれてゐる。棺からはみ出てゐる累々たる白骨の狀態はそゞろ蒙地幽芳作の「琉球と爲朝」を想起せしめる。此等の築墓は慶長年間と思はれる。

要之琉球の墳墓は橫穴古墳の系統及びその發達と見られる。而かも古くしても鎌倉期以降のものである。琉球にては石器時代の確在するものがあるがこの鎌倉期までを連關せしめる遺跡がない。茲に於いて琉球勾玉と「おもろ文章」の存在は此間の存續を示すに充分なものがあつて、此等を包括する南島琉球の研究は層一層興味を深めるものである云々。

●讀　史　會

例會　一月二十五日午後六時半より樂友會館第一號室に於て開催、西田教授以下二十名參會、恒例により左の卒業論文梗概の發表あり十時過散會。

藤原後期及鎌倉初期に於ける淨土教思想の發展　福尾猛市郎君
平安朝末期の歴史思想　金田　重雄君
復古神道に於ける尊王愛國の精神　宮田　爽美君
文久元年露艦對馬占據に關する外交史的研究　稲津　正志君
近世三教史の研究—特に神道を中心として　野部　長養君

例會　二月四日本年度卒業生送別會を兼ねて鳥初樓に於て開催、西田教授以下四十名參集、左の卒業論文梗概の發表あり十一時散會。

室町時代の集團運動　日置彌三郎君
近世初期の都市の發達　小川　勝君
大鏡と愚管抄　末森　量君
近世初期の學問　杉岡　憲一君
近世黎明期に於ける時代思潮の一考察　鈴木　祥造君

例會　三月十一日午後六時半より樂友會館第一號室に於て開催、西田教授以下十數名參集、左の卒業論文梗概の發表あり十時散會。

近世歌舞伎劇の精神と其の展開　田中　勝雄君
近世封建制度社會の性質　谷口　忠夫君
室町時代の精神と趣味生活　德永　職男君
近世經濟思想發展に關する一研究　有働　賢造君
近世に於ける思想抗爭に關する一考察　前田　一良君

●西洋史讀書會

例會　一月二十二日(金曜)午後六時半より樂友會館第一號室にて開催、竹村君の左の講演に次いで、左の三回生二君の卒業論文作成に就いての感想發表あり、十時半散會す。出席者十五名。

一、スペインの革命に就いて　文學士　竹村　越三君
一、雜　感　三回生　鹽見　高年君
一、雜　感　三回生　清水　巖君

二月六日(土)午後五時半より、一品香にて、中村善太郎先生歡迎會を兼ね、卒業生豫餞會を催す。出席者二十二名、快談數刻に及んで十時頃散會。

●東洋史談話會

例會　舊臘十二月八日(火)午後六時半より樂友會館に於て左の講演あり。

一、宋元交戰　野田不美男君

一、國語に見えたる普師の傳承に就て　小川　茂樹君

例會　二月十二日(金)午後六時半より樂友會館に開催、左の講演を聽く、時節柄未曾有の盛會であつた。

一、日清講和談判前後の外交關係　小川　祐人君

一、獨逸に於ける東洋研究について　W・ヘーニッシ君

一、上海事變について　松浦嘉三郎君

●委員　文學士　松野遵崇氏

大正六年京都帝國大學文學部國史學科を卒業し同十三年九月文學部助手として國史研究室に就任以降、氏は故評議員三浦周行博士の本に本會委員として編纂に關與せられたが、昨夏來固疾容易に癒へず遂に昨冬十二月十六日永眠さるゝに至つた。同月二十八日、京都三條、佛光寺別院に於いて告別式擧行さるゝに當り本會から、評議員濱田、西田兩博士外多數參列して故人の靈を慰める處があつた。

會報

●寄贈交換圖書雜誌目錄

東洋學報　十九の三　東洋協會學術調査部

大谷學報　十二の三、四、十三の一　大谷學會

國學院雜誌　卅八の一、二、三　國學院大學

龍谷史壇　九　龍谷大學

民俗學　四の一、二、三　民俗學會

史迹と美術　十四、十五、十六　史迹、美術同攷會

信濃　一、二、三　信濃鄉土研究會

人類學雜誌　四七の一、二　東京人類學會

史蹟名勝天然紀念物　七の一、二、三　同保存協會

史學雜誌　四三の一、二、三　史學會

歷史地理　五九の一、二、三　日本歷史地理學會

佛教美術　十八　佛教美術社

考古學雜誌　廿二の一、二、三　考古學會

史苑　七の二　立教大學史學會

經濟論叢　卅四の二、三　輕濟學會

青丘學報　六　青丘學會

商業と經濟　十二の二　長崎高等商業研究館

史蹟調査報告　第五、第六　文部省宗教局

日本古印刷文化史(木宮泰彦著)　冨山房

道家論辨牟子理惑論　神尾弐春

阿波えゝぢやないか　山口吉一

日本神話の研究(松本信廣著)　同文館

史學論文集(川合教授還暦紀念)　三田史學會

通報(T'oung Pao) Vol. 28 No. 1.2　Paul Pelliot

●會員動靜

●入會

京都市東山區祇園眞葛原　東伏見邦英氏
（右紹介　濱田耕作氏）
大阪市東區內本町橋詰町十五　野口　幸雄氏
（右紹介　中村直勝氏）
廣島高等學校　佐中　壯氏
（右紹介　中原與茂九郎氏）
富山市安野屋町、野村方　楠　正雄氏
京都市左京區田中門前町二、稻城方　米倉　二郎氏
朝鮮慶尙北道慶州博物館　有光　敎一氏
東京市外大崎町上大崎五三九、松山方　鹽見　繁行氏
（右紹介　島田貞彥氏）

●退會

舟木益五郎氏　相田　二郎氏　掘　常次郎氏

●死亡

維方　惟矩氏　松野　遜崇氏